

「曾屋水道」土木遺産に 今年完成130周年 住民主体で整備運営

大正期の配水池やポンプ室がある曾屋水道記念公園
＝秦野市水神町



秦野 住民主体で運営する全国初の簡易陶管水道として1890年に完成した曾屋水道（秦野市水神町）の施設群が、土木学会の選奨土木遺

産に認定された。市内建造物の認定は初めて。水道技術の推移を今に伝える遺産として評価された。11月に同学会から認定書と銘板が付与される。

曾屋水道はコレラ発生を機に、周辺の湧き水の利用を控えるため、住民が資金繰りや工事計画を考えて敷設した。明治、大正期の水源開口部や、大正と昭和期の配水池、大正期のポンプ室などの遺構が現存し、2017年10月に国登録記念物（遺跡関係）となった。

竣工130周年の節目を迎えた今年3月、市は曾屋水道の価値をPRするため同学会に認定を申請した。施設群を管理する市上下水道局は、認定を受け「児童向けの講座や地元ボランティアとのPRを通し、先人が水道事業を築き上げた偉業を受け継ぎたい」と話した。

認定制度は近代土木構造物の保存などを目的に、同学会が00年度に創設した。県内では猿島要塞（横須賀市）、横浜港の「ハンマーヘッドクレーン」などが選ばれている。

（井口 孝夫）